

歯科教育について

高橋 達也 廣瀬 詠太郎 森本 奏

私達のグループはこのプロジェクトで、平和とは何かというテーマからカンボジアの歯科教育について焦点を当てて発表しました。

まず、前提として人々が歯を磨くといった生活に余裕があるときは平和であると考えられるとします。従って、カンボジアで内戦があった 1970 年代は口腔内の健康について関心を向けることは少なかったと思うし、戦争が終わったからといって途端に改善されるものではないと考えられます。

口腔内の環境と体の健康は密接な関係があります。例えば、口腔内に細菌が増えるとサイトカインという物質が血管に放出され、これはインスリンに抵抗を示すため糖尿病に影響を与えます。そして糖尿病により免疫力や治癒力が低下するため歯周病が悪化するという悪循環に陥ることがあります。その他にも感染性心内膜炎、動脈硬化症、リウマチにも影響があるとされています。このように、口腔内の環境と健康は一見関係のないように思えますが健康的に生活するためには衛生的な口腔内が重要な要因です。

カンボジアの問題点または現状として、歯科医師の数が少なことが挙げられます。これは、1980 年代後半にクメールルージュによって引き起こされた内戦のために、歯科医師を含む多くの知識人が大量に虐殺されました。それによって歯科医療従事者はたった 30 人の生存者しかいませんでした。また、日本の歯科医師の数は 104533 人 (2016) でカンボジアの歯科医師の数はおよそ 700 人 (2018) です。これまでにカンボジアで歯科医師の数を増やす解決策として行われてきたのは国際的な支援です。これは唯一の被爆国である日本と比較したときに共通しており、国際的な支援によって復興を進めることが出来ました。例えば、ベトナムの歯科医師がカンボジアの歯科医療従事者に対して教育するといった支援がありました。そのほかにも日本の歯科医師が Malis Dental Clinic で働いています。

そこで私たちが今回歯科医師を増やすために提案したのは歯学部を増設することです。そのためにはまず口腔内の環境が大事だという認識を、カンボジア国内に浸透させる必要があると考えました。

～感想～

今回のプロジェクトでは、カンボジアについての現状を色々な方面から知り考えを深めることが出来ました。例えば、歴史的建造物の修復意義を考えるとインフラの整備や基幹産業の育成が急速に進んでいる一方で、保健や学校教育へのアクセスを普及させることについて考え、カンボジアが抱えている今後の展望や課題を見つめることが出来ました。しかし多くの情報を得たがために私たちはテーマをしばらく決めることは少し苦労しました。また、カンボジアのことを調べていく中でできるだけ自国の広島との比較をしながらプロジェクトを進めていくように努めることで、より深く自国について考える機会となりました。

約 10 日間という短い期間ではありましたが、多くの団体を訪問できるようにコーディネートしていただいたおかげで日々がとても充実していたように思います。貴重な経験をありがとうございました。(森本 奏)

今回のプロジェクトでカンボジアの歴史的背景について学ぶ過程でカンボジアにおいて大虐殺があったということを知りました。その出来事は比較的最近のことで現在でもその出来事によって年配の方々が少ないという点から苦労している点も多いと知り非常に衝撃を受けました。私は今回このような機会をいただいたからこそこの出来事を知ることが出来ましたが、普段通りの生活を送っている限り他の国の歴史的背景について学ぶ機会は非常に少なく、この出来事を知らない人も多いと思います。しかし、平和について考えるうえでも、また同じ過ちを繰り返さないためにもこれらの歴史について学ぶことは非常に大事だと思います。

他の国の文化や歴史を知ると同時に自国のそれらについてもより深く知ることにつながり、この点においても非常に貴重な経験をさせていただいたと思っています。(高橋 達也)

真夏のように蒸し暑い気候のカンボジアで訪問した小学校では、漣のようにキラキラと光る子どもたちの笑顔が見られた。彼らが育つカンボジア社会は、どのようなものか。日本人の私が二週間の滞在のうちに見つけた特徴

を、精神面、経済面から述べた上で、その関連を考えてみたい。

第一に、精神面では、個人主義が浸透していないように見えた。というのも、お邪魔した NGO「サラスूसー」で、スタッフの方が「カンボジアの人って自分の長所と短所を見出すのが苦手なんです」と零されていて、それはカンボジア人には「私」という感覚がないからなのではないか、と考えたからだ。

第二に、経済面では、外来の資本主義が広く浸透しているように見えた。観光都市シェムリアップでは欧米人や東アジアの人々をターゲットにしたリゾートホテルが乱立し、プノンペンではスターバックスやイオンが人気を博しているのである。

ところが、である。資本主義は個人主義を前提にしているはずでなかったか。大学の授業に英語での授業や外国人教師が登場していることを踏まえると、カンボジア社会が土着の文化を失い、外発的な変化を迎えているのではないかと危機感を感じる。

一方で、カンボジアの農業は、内戦によって緑の革命の影響をあまり受けなかったのもあって、カンボジアらしい—例えば労働集約的な—農業を貫いている。世界の均質化を嫌う私の感覚としては、カンボジアが農業をきっかけにカンボジアらしさを育んでいくことを祈っている。

いつかまたカンボジアを訪れたとき、あのキラキラとした子どもたちの笑顔が見られるのを楽しみに、筆を置くことにしよう。(廣瀬 詠太郎)